<原 著>

社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツ の正機能に関する一考察

藤 原 健 固*

(昭和49年4月18日受付)

A Study of the Function of Sports for the Reinforcement of Social Norms and Values

Kengo Fujiwara
(Chukyo University)

社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの正機能について、調査をもとにその意識・態度を明らかにし、その背景を考察した。

① 淡路島における調査と体育学部学生を対象とした調査とから、つぎの点が明らかになった。①、社会規範と価値の補強に果すスポーツの正機能が高く評価されている。②、体育学部調査では、①の割合は淡路島調査と比較して約半分となっている。同時に、③、スポーツの逆機能に対する評価においても、体育学部の調査に高く、淡路島でのスポーツ参加者がこれに続いている。

② 社会規範と価値の補強にスポーツが正機能を果すにあたって考えられる要件は、つぎの三点に根ざしている。①、スポーツが、本来、社会化に関係している。②、プライマリー・グループとしてのスポーツ集団そのものもっている機能。および、③スポーツ自体の内包する競争・協同の効果。これらの要件を①の結果を踏まえて考察した結果、若干の問題点が指摘された。

In this study, the functions of sports for the reinforcement of social norms and values were examined, and its background considered. Some findings are as follows.

(1) From the survey of the people of Awajishima and the students of a Department of Physical Education, next three points were found: (a) the function of sports for the reinforcement of social norms and values is appraised higher than its dys-function; (b) according to the survey of physical education majors, the rate of (a) was about half of the case at Awajishima; at the same time, (c) the evaluation of dys-function of sports for the reinforcement of social norms and values was high among physical education majors.

(2) The backgrounds of function of sports for reinforcement of social norms and values were found to come from next three points: (a) primarily, the relationship between sport and socialization was recognized; (b) the sport group has the function as primary group in contemporary society; and, (c) the sport itself has the effect of competition and cooperation.

Having in mind the comparison between these backgrounds and these of findings of findings of survey, some unsolved problems were pointed out.

(Kengo Fujiwara: "A Study of the Function of Sports for the Reinforcement of Social

Norms and Values," *Research Journal of Physical Education*, Vol. 19. No. 4・5, December, 1974, pp. 175~188)

緒 言

スポーツの目標を社会規範と価値の補強に求めようとする考えは、除々に強調されつつある。それは歴史的社会的背景を基盤にしているが、とくに1910年代のアメリカにおいて¹⁾、またわが国の場合、大正の初期において²⁾提示されるようになった。そして、今日、スポーツの人間側面の重視は、社会規範と価値の補強を度外視しては考えられないのである。

社会規範 (Social Norms) とは、社会的人間としての個人が思考様式・行動様式の是非善悪を評価する基準であり、「その淵源や、その違反への制裁³⁾」に裏打ちされたものである。具体的には、慣習・モーレス・法律・道徳・エチケット・伝統などをその内容とする。

価値 (Values) とは、何らの欲求を充足させる客体もしくはその性質を指しており、それを獲得する過程において何らかの犠牲と排除に裏打ちされたものである。M・ウェーバーの表現をかりれば、「価値の実現を目ざして、一時的な衝動を抑え、エネルギーを系統的に配分していく行動のシリーズ、すなわち、〈価値合理的行為〉⁴⁾」を生むものである。

社会規範と価値の補強 (reinforcement of social norms and values)——期待される社会的人間の形成——は、教育 (文化の獲得) に負わされており、それは主として世界観と秩序の問題にかかわっている。この際、世界観は超越的な存在とのかかわりを意味し、秩序は目標志向の体系の内部での諸単位がどのように調和すべきかを示す規準である。

社会規範と価値の補強に対するスポーツは、精神的次元での快活・剛毅・堅忍持久などを背景にしている。それは身体活動と精神活動の相即性に基づいていることは言を俟たない。「筋肉を活動せしむるばかりでなく、筋肉その他身体における重要な器管はもとより、精神をも発達せしむる⁵⁾」というとき、スポーツの人間側面は社会

規範と価値の補強へのパースペクティブを開いているものとして重視されなければならないのである。

しかしながら、社会規範と価値に対するスポーツの機能 (functions) について二通りの見方が存在するのが現実である。その一は社会規範と価値の補強にスポーツの積極的意義を認めようとするものであり、他はそれを否定するものである。それはとりもなおさず、スポーツの正機能 (function) と逆機能 (dysfunction) のどちらを重くみるかという問題である。

本稿の目的は、つぎの二点にある。

① 社会規範と価値の補強に果し得るスポーツの機能に対して如何なる意識・態度が指摘され得るか。

② ①で明らかにされた態度を可能ならしめる基本的要件は何か。

本稿で用いた「機能」という用語の及ぶ範囲は、主として意識の次元のものであり、結果としてのそれを意味しない⁶⁾。この点において「正味の差引き勘定⁷⁾」としての機能は、当然制約を免れない。

調 査 方 法

本稿で用いた資料は、『スポーツ総合調査』のうち〈社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの機能〉に関連する部分に限られる。『スポーツ総合調査』は下記の要領で実施された。

(1) 被調査者 (845名)

(i) 兵庫県、淡路島のコミュニティ・スポーツ新聞「スポーツ淡路⁸⁾」非購読者405名 (男, 203, 女 202), 同購読者 240 名 (男145, 女95), 計 645 名。(資料1参照)

(ii) 体育学部 (中京大) 学生200名 (男200, 女 0)

(2) 調査方法

無作意抽出法によるアンケート調査。

(3) 調査時期

昭和48年10月25日～昭和48年12月20日

資料 1 被調査者分類——淡路島

「スポーツ淡路」非購読者								「スポーツ淡路」購読者						
年代 性別	10代	20代	30代	40代	50代	定高	全体	10代	20代	30代	40代	50代	定高	全体
男	49	10	33	50	36	25	203	40	9	19	50	10	17	145
女	50	7	50	54	16	25	202	34	4	13	19	8	17	95

(4) 調査内容

『スポーツ総合調査』のうち主として「スポーツに対する態度調査」の中から18項目を抽出。

(本稿では便宜上、(i)、(ii)に分けて整理記述した。)(資料2)

結 果

(i) 兵庫県・淡路島 社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの機能に対する意識・態度は、資料3, 4のとおりである。

これらの資料は、スポーツが社会規範と価値の補強に積極的役割を果たしていることを支持するものである。すなわち、全体では約65%の人が社会規範と価値の補強にスポーツが積極的側面を有しているとのプラス評価(おおいに賛成5, 賛成4)をしており、マイナス評価(おおいに反対1, 反対2)は5%に過ぎないのである。こうしたスポーツの社会規範と価値に対する積極的役割の支持は、その消極的側面に対するマイナス評価に裏打ちされている。すなわち、スポーツが社会規範と価値の補強に役立たないとするものの割合は僅かに12%に過ぎないのである。しかしながら、消極的側面を積極的に否定するものは、必ずしも多くはなく、半分に過ぎない。ちなみに、「どちらでもない」とするものは、37%である。

さらに、社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの機能に対する意識・態度をみる場合、ローカル新聞「スポーツ淡路」の購読者や非購読者について検討する必要がある。まず、「積極的側面」についてみると購読者の方がプラス評価が高い。プラス評価で6%高く、「どちらでもない」とする割合は5%高く、マイナス評価は同じである。このことは、「積極的側面」を支持する割合が1割程度非購読者に比べ高いことを意味しているも

のと解してよいであろう。とくに、社会規範と価値の補強を促進するための思考様式や行動様式をスポーツに求めようとする態度(項目①-⑦, ⑧), および社会性の開発(項目①-⑥, ⑨, ⑩)などにおいてこの傾向が認められた。つぎに、「消極的側面」についてみると、購読者と非購読者との間に大差を認め難いものの、プラス評価とマイナス評価の双方においても購読者の方が高い点が注目される。このことは、購読者においてスポーツの「機能」に対する見方が多様であることを示すものであり、同時に、「問題点⁹⁾」を意識していることを意味していると考えられる。スポーツが社会規範と価値の補強に役立たないとする根拠は、スポーツの技術的側面の偏重(項目③-④), および封建的風土(項目⑤-⑥, ⑦, とくに購読者)に求められている。とくに、封建的弊害についての認識は非購読者の女性に高い。

以上のことから二つの点が明らかになった。それは、

① 社会規範と価値の補強に対してスポーツは正機能を果たすものとして認識されていること。

② ローカル・スポーツ紙の購読者は非購読者に比較して、「積極的側面」をより高く支持している。しかし、「消極的側面」についての支持率は、問題点を投げかけている。

そこで、②に関してローカル・スポーツ紙の購読者に与える機能が問われなければならない。すなわち、購読者と非購読者との間においてスポーツに対する見方が異なる要件は何か、という問題である。それは主として二つの指標に求めることが可能である。その一は購読者の方が非購読者に比べてスポーツにより多く接していることであり、その二は購読者の方が非購読者に比べてスポーツについてより深く知っているということであ

資料 2 社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの機能調査項目

「お願い」

あなたのスポーツに対する感じや意見について答えて下さい。

下にスポーツに対する意見が述べられています。そして、1つの意見にそれぞれ、5つの答えが用意してあります。意見をよく読んで、あなたの感じや意見によく合っていると思う答え(数字)を○でかこんで下さい。

.....

	おおいに 賛成	賛成	どちらとも いえない	反対	おおいに 反対
＜例＞スポーツは人を感激させる	5	4	3	2	1
	5	④	3	2	1
(イ) <u>社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの積極的側面</u>					
(1) スポーツは、公正な人格をつくり人間性を豊かにする。	5	4	3	2	1
(2) 人間は何かに熱中することが必要であり、スポーツはそれにもっともよくこたえるものの一つである。	5	4	3	2	1
(3) スポーツは、皆んなと仲よくやろうという気持を育てる。	5	4	3	2	1
(4) スポーツは、青少年の非行防止に役立つ。	5	4	3	2	1
(5) スポーツは、教育の欠くことのできない一つの領域である。	5	4	3	2	1
(6) めまぐるしく変化する社会にあってスポーツは仲間への参加を通じて集団の団結をもたらす。	5	4	3	2	1
(7) スポーツは、人間がどのように生き、労働し、考えるかについてヒントを与える。	5	4	3	2	1
(8) スポーツは、社会の期待している行動の指標（ものごとの考え方・行ない方の基準）を提供する。	5	4	3	2	1
(9) スポーツマンは、社会の約束ごとやきまりをよく守っている。	5	4	3	2	1
(10) スポーツは、人をひっぱっていく指導性（リーダーシップ）をたかめる。	5	4	3	2	1
(ロ) <u>社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの消極的側面</u>					
(1) スポーツは、人間を野ばんにし、誤った自信をうえつける。	5	4	3	2	1
(2) スポーツは、人間のもっている、たたかおうとする気持（闘争心）の一つの手段であり、あまり好ましいものではない。	5	4	3	2	1
(3) スポーツは、誤った英雄崇拜をもたらす、	5	4	3	2	1
(4) スポーツは、身体的訓練にかたより、精神的訓練をなおざりにする傾向をもっている。	5	4	3	2	1
(5) スポーツは、自己讃美にかたより、うぬぼれをつくりだす。	5	4	3	2	1
(6) スポーツは、従属的な人間をつくりだす。	5	4	3	2	1
(7) スポーツマンは、封建的で粗野な人がおおい。	5	4	3	2	1
(8) スポーツは、軽率で考えない人間をつくる。	5	4	3	2	1

資料 3 社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの積極的側面 (%) —— 淡路島

項目 性別		「スポーツ淡路」非購読者										「スポーツ淡路」購読者									
		5					4					3					2				
		1		2		3		4		5		1		2		3		4		5	
1	男	23	26	57	52	19	20	2	1	1	1	1	0	2	1	14	19	0	0	33	32
	女	31		48		21		0				0		0		26		42		31	31
2	男	24	21	46	50	24	25	5	3	2	2	2	0	2	0	15	18	0	0	39	33
	女	19		53		26		2		1	1	0		2		22		54		24	24
3	男	21	21	60	61	17	17	2	1	0	0	0	0	2	0	12	13	4	4	26	25
	女	21		61		18		0		0	0	0		0		26		57		22	22
4	男	14	16	61	54	22	27	2	3	0	0	0	0	2	0	16	23	1	2	32	28
	女	17		47		32		4		0	0	0		4		34		41		21	21
5	男	17	16	63	66	17	17	2	1	1	1	1	0	2	1	17	17	3	3	32	30
	女	14		68		16		1		0	0	0		1		21		49		27	27
6	男	13	16	53	54	29	26	4	4	1	1	1	0	4	1	17	17	1	1	26	26
	女	18		55		23		4		0	0	0		4		18		55		26	26
7	男	6	6	41	41	39	44	10	8	3	2	3	0	10	5	41	36	5	6	8	8
	女	5		41		49		5		0	2	0		5		28		54		7	7
8	男	3	2	29	26	60	57	6	11	2	1	2	0	6	1	46	47	32	8	4	4
	女	1		26		57		16		0	1	0		16		48		41		4	4
9	男	7	9	38	37	46	46	7	6	2	1	2	0	7	7	35	39	46	7	10	8
	女	11		36		47		6		0	1	0		6		44		38		8	8
10	男	8	8	40	40	41	41	8	8	2	2	2	1	8	2	30	35	46	5	18	13
	女	8		40		42		9		1	2	1		9		43		39		13	13
全体	男	14	14	49	48	31	32	5	5	2	2	2	0	5	3	24	27	48	3	23	23
	女	15		47		33		5		0	1	0		5		30		46		18	18

資料 4 社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの消費的側面(%)——淡路島

購読別 項目 性別		「スポーツ淡路」非購読者										「スポーツ淡路」購読者									
		5					4					3					2				
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
1	男	2	2	7	22	51	18	48	23	7	0	18	51	23	8	0	18	45	15	8	0
	女	2	2	11	24	46	17			11	0	17	46		8	0	17	35	21	8	0
2	男	2	2	7	33	41	17	44	34	7	1	17	41	34	10	1	26	50	5	10	1
	女	1	1	4	35	48	13			4	2	13	48		6	2	34	48	6	6	2
3	男	3	3	11	50	29	7	31	51	11	4	7	29	51	10	4	26	50	9	10	4
	女	2	2	7	52	32	6			7	0	6	32		7	0	34	48	7	7	0
4	男	3	3	15	42	33	6	36	41	15	3	6	33	41	20	3	30	38	18	20	3
	女	1	1	11	40	39	8			11	2	8	39		16	2	33	31	16	16	2
5	男	1	2	7	43	41	7	40	40	7	2	7	41	40	10	2	32	39	9	10	2
	女	2	2	13	36	39	10			13	0	10	39		7	0	34	35	7	7	0
6	男	2	2	8	42	39	9	34	47	8	0	9	39	47	15	0	32	41	15	15	0
	女	2	2	13	51	28	5			13	3	5	28		15	3	23	43	15	15	3
7	男	2	2	7	43	39	8	36	44	7	1	8	39	44	9	1	34	43	8	9	1
	女	3	3	6	45	32	13			6	0	13	32		5	0	40	43	5	5	0
8	男	0	0	6	38	45	10	48	34	6	2	10	45	34	15	2	43	30	13	15	2
	女	2	2	6	31	50	10			6	0	10	50		12	0	45	24	12	12	0
全体	男	2	2	9	39	40	10	40	39	9	2	10	40	39	12	2	36	36	11	12	2
	女	2	2	9	39	39	10			9	1	10	39		10	1	36	34	11	10	1

資料 5 「スポーツ淡路」購読者・非購読者にみるスポーツ体験とスポーツ歴

(%)

項 目	購読別	年 代		10 代		20 代		30 代		40 代		50 代		定・高		計		
		性 別																
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計
1ヶ月以内にスポーツをした	購 読 者	90	91	78	75	95	46	72	37	20	38	100	100	76	65	70		
	非購読者	98	84	60	43	71	34	42	24	19	13	88	88	63	48	55		
スポーツ歴3年以上	購 読 者	68	65	56	75	42	23	74	42	80	25	82	82	67	52	60		
	非購読者	53	76	41	14	32	28	40	24	22	6	52	20	40	28	34		

資料 6 スポーツについて相談をもちかけられた割合

(%)

購 読 別	年 代		10 代		20 代		30 代		40 代		50 代		定・高		計		
	性 別																
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計
購 読 者	40	18	44	0	58	15	50	21	30	0	24	24	41	13	27		
非購読者	24	12	31	0	40	13	8	9	8	0	8	12	20	8	14		

る。

資料5は、ローカル・スポーツ紙の購読者と非購読者のスポーツ体験とスポーツ歴の相異をみたものである。「1ヶ月以内に何かスポーツをした」ものの割合は、購読者の70%に対し、非購読者は55%である。ここで注意すべき点は、定時制高校（定・高）と10代の殆んどが生徒であることから高い割合を示していることであるが、20代～50代の割合をみても全体の傾向は変らない。すなわち、20代～50代の全体の割合は57%であり、性別では男66%、女49%である。これに対し非購読者の20代～50代の全体の割合は36%であり、性別では男48%、女28%である。また、スポーツ歴（3年以上）についてみると購読者60%、非購読者34%である。20代～50代までの購読者のそれは52%であり、非購読者のそれは26%に過ぎない。性別で20代～50代のスポーツ歴をみると購読者男63%、女18%である。

資料6は、スポーツについて相談をもちかけら

れた割合をみたものである。全体では20%であるが、購読者の方が非購読者に比べて約2倍を示している。とくに40代の男性50%に対し、同代女性は8%に過ぎない。このように男性の方が高い割合を示す傾向は資料7でも指摘し得るが、ここでも同様である。しかし、注目すべきは資料5の男女の比がほぼ10%の差であるのに比べ、資料6のそれは約30%と高い点である。

以上の結果から、つぎの三点を指摘し得る。

③購読者は非購読者に比較してスポーツに接触する機会（直接参加）が豊富である。とくに、スポーツ歴では購読者は非購読者の2倍を示している。④購読者は非購読者に比較してスポーツについてよく知っている。⑤ローカル・スポーツ紙の果す機能が認められる。全般にいえることであるが、とくに10代、定・高、の購読者、非購読者の示す差異に注目——いずれも購読者の方が高い。しかし、ローカル・スポーツ紙を読むからスポーツ体験が豊かになるのか、スポーツ体験を得るこ

資料7 社会規範と価値の補強に及ぼす
スポーツの積極的側面——体育学部学生

項目 \ 評価	5	4	3	2	1
1	21 (11)	87 (44)	86 (43)	2 (1)	4 (2)
2	50 (25)	106 (53)	38 (19)	4 (2)	2 (1)
3	17 (8.5)	82 (41)	88 (44)	8 (4)	5 (2.5)
4	25 (12.5)	114 (57)	55 (27.5)	3 (1.5)	5 (0.5)
5	73 (36.5)	108 (54)	18 (9)	1 (0.5)	0 (0)
6	27 (13.5)	131 (65.5)	37 (18.5)	2 (1)	3 (1.5)
7	12 (6)	80 (40)	96 (48)	10 (5)	2 (1)
8	5 (2.5)	76 (38)	100 (50)	16 (8)	3 (1.5)
9	5 (2.5)	47 (23.5)	117 (58.5)	21 (10.5)	10 (5)
10	20 (10)	87 (43.5)	84 (42)	7 (3.5)	2 (1)
計	255 (12.8)	918 (45.9)	717 (35.9)	74 (3.7)	32 (1.6)

() は%

とによってローカル・スポーツ紙に接触するののかのメカニズムについては明らかではない。(しかし、この問題についての考察は本稿の目的ではない。)

(ロ) 体育学部学生 資料7, 8は, 社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの正機能に対する体育学部学生の調査結果である。

「正機能」に対する支持率をみると, 全体では59%の学生がプラス評価をしており, マイナス評価は5%に過ぎない。ちなみに, 「どちらでもない」とするものは36%である。淡路島調査と同様, ここでも「逆機能」に対するマイナス評価は高く, スポーツの社会規範と価値に及ぼす正機能を支持する結果を得た。全体でマイナス評価は46%であり, プラス評価は14.3%である。ちなみに, 「どちらでもない」とするものは39%である。しかしながら, 「逆機能」を積極的に否定するもの

資料8 社会規範と価値の補強に及ぼす
スポーツの消極的側面——体育学部学生

項目 \ 評価	5	4	3	2	1
1	3 (1.5)	9 (4.5)	51 (25.5)	89 (44.5)	48 (24)
2	3 (1.5)	10 (5)	43 (21.5)	123 (61.5)	21 (10.5)
3	6 (3)	34 (17)	96 (48)	56 (28)	8 (4)
4	3 (1.5)	33 (16.5)	74 (37)	72 (36)	18 (9)
5	3 (1.5)	38 (19)	75 (37.5)	72 (36)	12 (6)
6	2 (1)	29 (14.5)	108 (54)	54 (27)	7 (3.5)
7	4 (2)	26 (13)	103 (51.5)	57 (28.5)	10 (5)
8	8 (4)	28 (14)	74 (37)	68 (34)	22 (11)
計	34 (2.1)	197 (12.3)	624 (39.0)	590 (36.7)	146 (9.1)

() は%

は, 淡路島調査 (51%) より低く, 46%となっている。

社会規範と価値の補強にスポーツが果たす役割についてその積極的側面をより重視する見方は, 淡路島調査の方が高い。同様に, 「逆機能」をより指摘する割合は体育学部調査の方が高い。それは体育学部学生の方が実際にスポーツにより多く参加しており(とりわけ, 35%が競技スポーツ部員, スポーツの本来具有しているマイナス面を肌で感じとっているからにほかならないといえるだろう。

とくに, 現代の競技スポーツ志向への飽むことのない追求は「誤った英雄崇拜」(項目④-③)をもたらすもの(32%)として受け取られ, その結果「自己讃美に陥りうぬぼれ」(項目④-⑤)をつくりだす(20.5%)ものとする批判が強い。ちなみに, 淡路島調査では項目④-③, ⑤に対する支持率はともに11.1%である。そして, こうしたスポーツのもたらす消極的側面は, 「軽率で考えない」(項目④-⑧)人間をつくるものとして警戒され

る。(体育学部調査18%, 淡路島調査10%) しながら, 「闘争心」(項目④-②) に対する評価は, 体育学部調査の方がマイナス評価が低く2%に過ぎないのに対し, 淡路島調査では8%を示している。

「積極的側面」についてみると, 「教育の一環」(項目④-⑤) としての位置づけが高い, (86%) また, 「団結」(項目④-⑥) への橋渡しとしてスポーツを評価している (79%)。さらに, 現代の大衆社会状況下において, 「燃えること」(項目④-②) の意義をスポーツに求めている傾向が強い (78%)。これらの項目に対する支持率は, いずれも体育学部調査の方が高い数値を示している。しかしながら, 「規則を遵守」(項目④-⑨) をスポーツに求めようとする態度は比較的稀薄である (26%)。換言すれば, 4人のうち1人は, “ルールを守る” というスポーツマンシップの必須条件の一つに信頼をおいていないというショッキングな結果を得たのである。これに関連して「協調精神」(項目④-③) を体得するものとしてスポーツをみている割合も淡路島調査の83%に対し, 体育学部調査では50%に満たない。また, 「人間性涵養」(項目④-①) にスポーツが資するとの見方も淡路島調査が圧倒的に高く (79%), 体育学部調査では55%に過ぎない。

考 察

社会規範と価値の補強にスポーツが正機能を果たすに当たって考えられる要件は, (1)スポーツが, 本来, 人間的側面に関係していること, (2)プライマリー・グループとしてのスポーツ集団そのものの有している機能, および(3)スポーツ自体の内包する競争・協同の効果に根ざしている。しかし, スポーツは, 本来, 「逆機能」をも兼ね備えており, とくにスポーツ体験の豊富なものがこれを強く指摘するという結果を得たのである。それは, 期待・可能性としての「積極的役割を果たすに当たって考えられる要件」が, 必ずしも現実ではなく, 逆に現実の「場」においては深刻な問題点に直面していることを意味するものである。これらの文脈において, スポーツが社会規範と価値の補強に果たす正機能, が問われなければならない。

(1) 社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの基本的目標スポーツは, 状況(意味をもつ生活の場面)に何らかの変化をもたらすものである。それは, 言うまでもなく, スポーツの技術的側面と人間的側面を介して行なわれる。この変化を期待するところにスポーツの目標(goal)が位置づけられるのである。それ故, 期待は哲学に支えられており, スポーツは目標に指向する行動といえることができるのである。具体的には, 人間性涵養(項目④-①)をスポーツに求め (70%), 燃えることの意義(項目④-②)を体得し (77%), 集団の団結(項目④-⑥)に資する (76%) べくスポーツの目標が位置づけられているのである。

ここに, 目標指向的行動としてのスポーツが個人とかかわりをもつ基本型がみられるのであり, 個人にスポーツが認容される選択過程のなかに, すでにスポーツの社会規範と価値とのかかわりの基本的要件を汲みとることが可能なのである。この選択過程は三つの側面に求められる。

第一の選択側面は, スポーツ参加者にとってスポーツを選択することが自己の抱いている深遠な目標に有効な教育手段(項目イ-⑤)であると判断される点にある。(資料9) いうまでもなく, <手段——実践——目標の獲得>は, 人間行動の基本型である。

第二の選択側面は, スポーツ参加者にとってスポーツを選択することが自己を導く価値の一貫的な実現(項目イ-⑦)において, 適当であると判断される点にある。(資料10) ここでいう価値とは, 種々な犠牲または排除を伴う選択過程において到達するに値すると思われる客体を指しており, 欲求充足的な意味以上のものを要求するものである。

第三の選択側面は, スポーツ参加者にとってス

資料9 第一の選択側面

資料10 第二の選択側面

資料11 第三の選択側面

スポーツが自己の欲求充足にうまく充当する（項目イ②）と判断される点にある。（資料11）それは、かれにとって＜手段——実践——目標の獲得＞過程において、スポーツが感情的に符合することを意味している。

それ故、選択側面の第一と第二は＜合理的判断＞に負っており、第三のそれは燃える思いの＜非合理的判断＞に根ざしたものである。

以上の如く、スポーツは＜目標＞＜価値＞＜感情＞の三つの選択側面を通過したものである。これらの側面はスポーツ参加者個人の問題であり、それが行動に移されるには外的条件（「場」「知識」「仲間」など）の充足を待たなければならないことは言うまでもない。しかし、スポーツが目標を指向しそれが現実の環境で価値を付与され且つ楽しいことに求められるとき、社会規範と価値の補強を促進する社会的人間形成への可能性が認められるのである。それ故に、スポーツは社会的に認容された文化として位置づけられているのである。しかしながら、価値が多様化され且つ一時性に特徴づけられる現代社会にあって、「スポーツは軽卒で物事をよく考えない人間をつくる」といった現実の問題点を無視することは許されないのである。すなわち、3つの選択側面の総合構成比率はすべて7割前後を示しているにも拘らず、スポーツは軽卒で物事をよく考えない人間をつくる

（項目②—⑧）ことも同時に指摘しているのである。そして、注目すべきはスポーツへの接触度合いが高くなるにつれて、選択側面の総合構成比率は高くなる反面、「軽卒」を指摘する度合いも高いということである。この点は体育学部調査において「軽卒」を否定する割合が最も低い（淡路島

資料12 選択側面の構成比と「軽卒」の関係

(i) 非購読者

(ii) 購読者

(iii) 体育学部学生

調査に比較して約15%) 点にも裏打ちされているのである(資料12)。

(2) 社会規範と価値の補強に与えるスポーツ集団の役割一般にスポーツ集団は、顔と顔を付き合わせた関係(face-to-face relationship)に基づく小集団である。小集団は、①少数者の直接接触を基盤とし、②相互のコミュニケーションが行なわれ、③特定の課題を遂行する目的をもった、④一定期間存続し続ける集団であり、個人に社会規範と価値の補強を強いる大きなプレッシャーを果す。それ故、スポーツ集団は、個人にとって社会規範と価値の補強を現実のものとする主要な源泉であり、個人と社会を結ぶきわめて重要な媒介項としての機能を果し得るのである。とくに、協調性(項目イー③)を獲得し(70%)、集団の団結(項目イー⑥)を高める(76%)なかで、個人は社会規範と価値を自ら体得するべく位置づけられ

ているのである。しかしながら、協調性獲得をスポーツに求めるといっても、体育学部調査では「どちらでもない」とする数値がもっとも高く、否定的指摘も淡路島調査に比較して高い。(資料13) 同じことが小集団所属による団結をスポーツに求める割合においても認められる。(資料14) これらの資料は、スポーツ集団が個人に対し社会規範と価値の補強を現実のものとする主要な源泉たり得ることは認めても、スポーツへの接触の程度においてそれが現実には媒介項として逆機能の要素をも含み得るものであることを示唆していると解することが可能であろう。

こうした事情は、現代社会の急激な変化のなかにあって、プライマリー・グループとしてのスポーツ集団もつぎの如き背景と無縁ではあり得ないことを意味している。すなわち、経済成長を主軸とする社会の変化において、個人はその位置を見失いがちであること。それは現代社会が技術革新・都市化・核家族化・高学歴化・余暇の拡大・情報化などの色彩を濃くする一方、個性の喪失・人間疎外・世代間の断絶・コミュニティ意識の欠除・公害・自然破壊などといった問題を背景にしていることに根ざしている。このような状況は、必ずしもスポーツを通じて社会規範と価値の補強が約束され難いという現実を示唆するに十分であろう。すなわち、スポーツによるルールの遵守(項目イー⑨)、および行動の指標獲得(項目イー⑧)への信頼感はわれわれの予想に反するものである(ともに半分以下)。加えて、ルールの遵守にいたっては体育学部学生がもっとも否定的であり、購読者がこれに続いているのである。しかし、社会的行動の指標をスポーツに求める態度は逆になっている。本来、ルールの遵守と社会的行動の指標は同次元のものであるにも拘らず、調査結果はこのように跛行的様相を呈しているのである。この事実は、とりもなおさず、スポーツに対する期待・可能性にける夢と現実の溝を示すものであるものである。(資料15) こうした跛行的様相は現代の大衆社会状況下において、個人がもはや社会を肌で感じるということが不可能になっていることにその原因の一つを求めることが可能であろう。すなわち、個人—社会という関係で個人と

資料13 協調性獲得をスポーツに求める割合

資料14 小集団所属による団結をスポーツに求める割合

資料15 スポーツによるルールの遵守と社会的行動指標の獲得割合

(i) ルールの遵守

(ii) 社会的行動指標

社会を理解しようとする従来の概念図式は、いまや個人—小集団—社会という図式に変えなければ現実性をもたないといえるのである。それは個人にとって接触し得る数名ないし数十名の小集団を通じてのみ、われわれは社会をとらえることが許されることを意味している。換言すれば、個人は小集団というフィルターを通して社会をみているのである。

ここに、プライマリー・グループの再評価という問題が生じてくる。それは個人の生活において全人格的接触の許容範囲が狭まりつつある現代社会への郷愁にも似た人間性回復への叫びに根ざしている。現代社会の目的合理性を基盤とする多様なセカンダリー・グループの圧倒的存在は、個人をしてその人格を奪い全体として統一ある人間の存在を危うくしているのである。

しかし、もっと現実的もしくは積極的次元において小集団の役割は大きい。それは小集団が多様な目的遂行によって効果的な媒介項としての役割

を果し得ることに根ざしている。スポーツ集団についていえば、それはスポーツの技術的側面と人間的側面の修得を可能にしているのである。とくに、後者に関して、スポーツ集団の有している規範と価値が参加者に与える影響は大きく、セカンダリー・グループ内での思考様式・行動様式の指針の形成に温床としての影響力（項目イー⑧）をもっているのである。それは、スポーツが社会構造と社会過程において組織化された“遊び”として、社会と社会生活を反映しているからにはほかならないからである。この意味で、スポーツは社会規範と価値の補強もしくは減退に多大のかかわりを有しているのである。

しかしながら、現代社会の技術・知識の優先という跛行的状況はスポーツ集団をもその例外たるを許さず、その弊害を露呈していることは、既述の如く、調査結果の示すとおりである。

(3) 社会規範と価値の補強に与える競争・協同の効果 競争 (competition) とは、「同一の対象の獲得・目標の達成に指向している複数の個人あるいは集団が、相互に他より迅速に対象を獲得あるいは目標を達成し、他に優越しようとする場合、相互の間に成立する社会行動ならびに社会関係の形態¹⁰⁾」であり、ウィーゼはその指向される対象を“対象指向的競争”、“主体指向的競争”に大別している。前者には、物質的財貨および非物質的価値＜社会的地位・名誉・威信＞が含まれ、後者は競争者自身の才能・能力の展開＜運動競技における新記録の樹立・得点の獲得などを＞含む¹¹⁾。まさに、スポーツは個人またはチームが他の個人またはチームに優越していることを証明することにはほかならない。

スポーツの場でみられる主体指向的競争は、多かれ少なかれ他者の満足の排除という形をとる。しかしながら、競争は相手の妨害または挫折を主たる指向とせず、課題遂行に指向するものである。同時に、競争はルールの遵守という領域内で行動が発現される。ここに、闘争とは別の次元の競争の意義が認められるのである。闘争も競争もともに課題遂行過程において障害物を排除するという形をとるが、前者の結果が生活を左右するのに対し、後者のそれは生活に直接の影響をもたら

さない。それは〈遊び〉としてのスポーツの場での競争において明らかである。スポーツが、本来、〈遊び〉として“非日常的”なものとして、位置づけられる所以である。ここに競争によるメリットが隠されているのである。

それは競争行為における協同という概念によって理解される。すなわち、協同 (cooperation) とは、「複数の個人または集団が、共通の目的または対象を獲得・達成するために、多かれ少なかれ組織的な方法によって、相互の活動を調整し、共同の効果をもたらそうとするような社会行動・社会関係¹²⁾」である。それは、スポーツ集団においては課題遂行過程での各プレイヤー間の行為の調整・統合として受けとられる。そして、スポーツの場では直接的協同が主体であり、顔と顔をつき合わせた関係 (face-to-face-relationship) が維持されるのである。

こうした直接的協同の意義は大きい。とくに現代社会の急激な変化の波は、一般に協同者を地理的に隔絶し、その結果間接的にしか接触し得ず部分的協同もしくは間接的協同を余儀なくしているのである。その結果、全人格的接触を弱め、人間性を奪う傾向を否定し得ないのである。それは協同が、本来、自発性に基ずいたものであるにも拘らず、強制に求められつつあることを意味する。この意味からも、小集団内での主体的競争とその過程での直接的協同の及ぼす社会規範と価値の補強への役割が認められるのである。それはスポーツ集団において顕著にみられる特性であり、とくに体得にその根拠を見い出すことが可能である。

競争と協同は、スポーツの場ではおよそ次の如き関係を有しているものとみることができる。すなわち、個人が覇を競う場合には競争関係が優先する傾向を有し、集団 (チーム) で覇を競う場合には協同関係が優先する傾向を有するが、こうした関係は背反関係にあるのではなく、種目によって一方の特性がより強く出てくるというほどの意味である。

スポーツの場での競争・協同関係は、社会規範と価値の補強に積極的意義を果している。少なくとも果す可能性をもっていると言わなければならない。それはこうした関係のなかで、スポーツ参

加者は特定の規範と価値を好ましい態度 (attitude) として身につけていくからにはほかならないからである。しかしながら、大衆社会状況下の現実のスポーツをとりまく環境は、スポーツを単なる“遊び”として非日常的な場に求め難い要素を徐々に濃くしている。それは競技スポーツにおいては技術の高度化とそれに伴う日常的な報酬を期待し得る場として、またレクリエーション・スポーツにおいても現在のそれは経済的・時間的余裕を満し得るもののみが、主としてスポーツの場に参加し得るという意味でともにエリート化されている点に求められる。それ故、現実のスポーツは多少なりとも日常性のうえに成立しており、ここにスポーツに対する期待・可能性が跛行的様相を呈する一因を認め得るのである。すなわち、社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの正機能についての支持率は全体で64.9%であるものの、体育学部学生のそれは最も低く58.7%となっているのである。同様に、その逆機能を指摘するものの割合は全体で12.8%に過ぎないものの、体育学部学生が最も高く14.4%を示しているのである。すなわち、スポーツに接触する度合いが高いほどスポーツのもっている期待・可能性と現実の落差を指摘しており、われわれにとってこの落差を冷静にとらえる姿勢が要求されるのである。それは、とりまなおさず、現実のスポーツが競争によるメリットを指向しながらも競争への危険性をはらんでいることの認識にほかならない。

結 語

知識・技術優先の現代社会にあって人間がその能力の一部をしか発揮できない傾向を深めつつある今日、社会規範と価値の補強に及ぼすスポーツの積極的機能が一応評価されている。しかしながら、それは調査結果の示すとおり、跛行的様相を呈しているのである。それは「期待・可能性」としてのスポーツと現実のスポーツによる社会規範と価値の減退の間の落差がよういならざるものに発展しつつあることを示唆している。

それ故、結果としてのスポーツの社会規範と価値に及ぼす機能についての考察が、改めて求められなければならないであろう。そのうえで社会規

範と価値に及ぼすスポーツの機能が、「正味の差引き勘定」として議論の対象となり得るが、当面はとりもなおさず、“中範囲の理論”(T. パーソンズ)を目ざす必要がある。

参 考 文 献

- 1) 石川旦「アメリカにおける体育目標の概念構成に関する研究(1920-1969)」『体育科辞典』p. 444. 第一法規出版, 1963. 1910年から1962年までに出版された体育学書のうちスポーツと社会規範と価値の関連性はつぎのとおりである。すなわち, スポーツの目標を態度・習慣に寄せるもの12, 道徳性に寄せるもの9, そして行動基準・適応・人間関係に寄せるものは, 実に18に達しているのである。
- 2) 「学校体操教授要目」大正2.
- 3) 鹿島研究所出版会「社会科学大事典」Vol. 9. P. 306. 1970.
- 4) Weber M.; Soziologische Grundbegriff, Wirtschaft und Gesellschaft. 阿閉吉男他訳『社会学の基礎概念』pp. 39-40. , 角川文庫, 1953.
- 5) 二宮文右衛門「学校体操」p. 31. 目黒書店, 大正15.
- 6) Merton R. K.; Social Theory and Social Structure, 森東吾他訳『社会理論と社会構造』pp. 16-77, みすず書房, 1961.
- 7) Merton R. K.; 同上.
- 8) 「スポーツ淡路」紙は, 蛇持茂富氏が編集発行しているコミュニティ・スポーツ新聞である。淡路島全域をカバーし, 島内で行なわれる草野球から対外試合までを網羅している。昭和49年3月現在で発行回数1073回を数えている(月3回発行)。
- 9) 理想と現実, もしくは期待・可能性と現実の矛盾
- 10) 「社会学辞典」p. 159, 有斐閣, 1958.
- 11) 同上, p. 159-160. 1958.
- 12) 同上, p. 161. 1958.